

本日の金持ちとラザロの譬え話は、生きている間に富んでいた者が死後の世界では地獄に行き、逆に生きている間に貧しかった者は死後の世界で天国に行くといエスが言っているように受け止めてしまうような書き方になっています。しかも、26節以下の譬え話の後半部分では、この逆転劇は決して変更できないことをダメ押しするような語り口になっています。

けれども、そのようにこの譬え話を理解してしまうと、生きている間に艱難辛苦に耐えていれば天国に行けるけれども、生きている間にお金持ちであるならば死後には逆転して、地獄に落ちるように理解してしまう危険性があります。そして、今の地球上に敵としてある貧富の格差があることが逆に肯定されてしまう危険性があるように思われます。

「天国では幸せになることができるのだから、この世では我慢しなさい」というような、現状肯定の論理にすり替えられてしまう危険性を感じます。もちろん、イエスにそのような意図はありません。この譬え話をもう少し丁寧に読み込んでみると、そのことがわかります。

19節によると、この金持ちは上等な衣を着て、毎日贅沢に暮らしていたのですが、その名前が貧しいラザロのように出てきません。一方で、できものだらけのラザロは、この金持ちの門前で、その食卓から捨てられた残飯で飢えをしのいでいて、犬からも憐れみを受けているような人物です。

ところがそれぞれ死んでみると、ラザロは天使たちによって天国の宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れていかれたのです。一方の名無しの金持ちは陰府でさいなまれていたのですが、その金持ちが目を上げると天国の宴席でアブラハムと一緒にいるラザロが見えたのです。おそらく、生前に自分の家の門前で残飯をいつももらっているラザロのことを覚えていたのでしょう。

そこで、金持ちは大声でアブラハムに呼びかけたのです。ラザロを自分乗る陰府によこして、ラザロの指先を水に浸して、そのわずかな水で炎の中でもだえ苦しんでいる自分の舌を冷やしてくださいと願ったのでした。

ところがアブラハムは『お前は生きている間に良いものをもらっていたが、ラザロは反対に悪いものをもらっていた。今は、ここで彼は慰められ、お前はまだえ苦しむのだ。そればかりか、わたしとお前たちの間には大きな淵があって、ここからお前たちの方へ渡ろうとしてもできないし、そこからわたしたちの方へ越えて来ることができない』と金持ちに厳しい言葉をかけるのです。死後の世界においては、金持ちとラザロの間に越えられない大きな淵があるということです。

この越えられない大きな淵は、生前に金持ちが自分の家の門前で残飯をもらって飢えをしのいでいたラザロを丁寧に扱うことができたにもかかわらず、残飯を食べに来ていた犬と同じ扱いにしていたことの裏返しの結果なのです。

そこで金持ちは、自分がいる陰府と天国に越えられない大きな溝があることを認識したので、今度は自分の兄弟5人のところにラザロを遣わしてくださいとアブラハムに懇願するのです。30節の『もし、死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行ってやれば、悔い改めるでしょう』という金持ちの言葉からわかるように、金持ちの兄弟たちはいまだに悔い改めていないのです。

この金持ちとは自分と同じように生前に悔い改めることがなければ、陰府に捨て置かれている今の自分と同じ運命が兄弟たちにも及びと考えたのでしょう。兄弟たちのところにラザロが行って忠告してくれるならば、さすがに兄弟たちは悔い改めて陰府に来ることにならないのではないかと考えたのです。

ところがこの訴えもブラハムはすくさま退けます。現生で贅沢な生活をしている兄弟たちには『モーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい』(29節)と言って、既に悔い改めをするために必要な言葉がモーセと預言者によって兄弟たちには与えられているというのです。あとは兄弟たちがモーセと預言者たちの言葉を真摯に受け入れて悔い改めればよいだけの状態にあるというのです。

この金持ちが自分の兄弟たちのことを心配してラザロを遣わして忠告してくれたならば、兄弟たちも悔い改めて自分と同じように陰府に来て苦しむことがなくなるという心遣いが、生きている間に実行することができたならば、ラザロを招いて一緒に食卓に就くようなことをしないまでも、門前で飢えているラザロに幾分かでも心遣いができたと思われれます。ラザロは生きている間、全身にできものができていて働くこともできずに、この金持ちの家から出る残飯で飢えをしのいでいました。

この金持ちにラザロへのほんの少しの心遣いができたならば、食べ物に分け与えることができたはずですが。けれども、この金持ちはラザロの存在を知っていないながら、何の憐れみもかけませんでした。このようなことは現代でも起こっています。宇宙開発企業スペースXの創設者であるイーロン・マスク氏は同社の衛星インターネットサービスであるスターリンクについて、ウクライナ政府からの使用要請に対して、回線の接続を切るように自社の技術者に指示していたことがアメリカのメディアで報じられました。

しかし、その後一転してスターリンクをウクライナ側に使用させることにしたのですが、最初の接続断絶の指示は、世界から批判を浴びることになって訂正したようです。そこには高度な政治判断があったのかもしれませんが、ウクライナの側に益する相対的に自社の利益が損なわれると判断したのでしょう。私はこの譬え話に登場する金持ちの発想と同じに見えてしまうのです。

ウクライナの反転攻勢の様子を解説するニュースを気をつけて見ていますが、気になるのは、ロシアの侵略について解説する人たちに。防衛研究所の人たちが多数出演していることです。このようなことはこれまでなかったことです。敵基地先制攻撃も既に当たり前のこととして、当然のこととして政府は前提にしていますが、ロシアの侵略戦争に乗じて、これまでの日本の防衛戦略が大きく変化していることに、ある意味危機感を抱いています。無条件に戦争放棄が良いとは思いませんが、何か大きく戦争翼賛の方向へと進んでいることに危機感を覚えます。



